



Title	B. L. Additional MS 37790 f.102r : Julian of NorwichのShort Text の五つ目の啓示に関する解釈をめぐって
Author(s)	吉川, 史子
Citation	大阪大学言語文化学. 2006, 15, p. 169-177
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77895
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

B. L. Additional MS 37790 f. 102r

—Julian of Norwich の Short Text の五つ目の啓示に関する解釈をめぐる—*

吉川史子**

キーワード：Julian of Norwich、*Revelations of Divine Love*、写本

In this paper two major editions of the Short Text of Julian of Norwich's *Revelations of Divine Love* are compared: (a) the edition compiled by Beer (1978) and (b) the edition by Colledge and Walsh (1978), both based on B. L. Additional MS 37790. There is one crucial difference in their editorial policies. Colledge and Walsh (1978) always adopt the corrections made by the 15th century corrector of the Short Text, but Beer (1978) does not. Beer (1978: 20-22) points out that the corrector's emendations are usually in accordance with the Long Text, but that the corrector has failed to emend two words in f. 102r that he should have corrected according to the reading of the Long Text. This paper proposes other possible readings of the part in question, referring to other similar structural patterns and spellings in the same text.

1 はじめに：研究の目的と方法

本研究は十四世紀英国神秘主義を代表する散文の一つ、Julian of Norwich の *Revelations of Divine Love* を含む現存する写本の中でも、その Short Text を含む唯一の写本 British Library Additional MS 37790 を扱う。この写本は、1910年にサザビーズの Amherst Library のセールで British Library が獲得し、Amherst 写本と呼ばれている¹⁾。*Revelations of Divine Love* を含む写本（断章を除く）はこの神学的作品を集めた B. L. Additional MS 37790 を含めて全部で六つあり、Long Text を含む Paris 写本 (Paris, Bibliothèque Nationale, Anglais 40)、British Library に納められている二つの Sloane 写本 (British Library, Sloane 2499 と 3705)、Stowe 写本 (British Library, Stowe 42) と、Long Text と Short Text と異なる Westminster Cathedral 写本 (Westminster Cathedral, Treasury 4) の存在が知られている。Paris 写本と、Sloane 2499、Sloane 3795

* B. L. Additional MS 37790 f. 102r: With Special Reference to the Fifth Revelation in Julian of Norwich's Short Text (YOSHIKAWA Fumiko)

** 広島修道大学商学部

¹⁾ *Catalogue of Additions to the Manuscripts in the B. M. in the Years MDCCCLVI – MDCCCX* (1912)、Beer (1978: 9) 等参照。

は校合して校訂されることが多く²⁾、Stowe 写本は 1670 年の Serenus Cressy の校訂本との共通性が認められている近代に入ってから写本である (Reynolds and Holloway 2001: 500, 501)。

本研究で取り扱う Short Text の Amherst 写本に関しては Frances Beer (1978) や Edmund Colledge and James Walsh (1978) による校訂が出版されており、多くの研究に利用されている³⁾。これら二つの校訂を比較すると、それぞれの校訂の方針の違いによるものと考えられる読みの違いが全体に渡って見られるばかりでなく、校訂の際の不注意による誤りではないかと考えられるような違いも散見される。これらを比較する者を驚かせることには、Short Text の一番最初の単語の読みからして違っており、Beer (1978) は “There es a vision schewed be the goodenes of god to a deuoute woman” と始まるのに対し、Colledge and Walsh (1978) は “Here es a vision schewed be the goodenes of god to a deuoute woman” となっている。写本を見ると、最初の飾り文字では h を囲むように T が書かれているのが見受けられる。Colledge and Walsh (1978) はこれを認識しており、その序章 (1978: 1) において、写本彩色師が p を入れるべきところに T を入れてしまい、それを訂正するために h を書き加えて最初の二文字を飾り文字として入れている、つまり、Th を飾り文字として入れていると指摘しているが、校訂した Short Text では “Here” とし、その脚注では写本彩色師が間違えて入れた T を消さずに H を入れていると述べていて (1978: 201)、この部分について彼らがどう解釈したのか判りかねる。Beer (1978) と Colledge and Walsh (1978) は文の区切り方等他の点でも相違が見られ⁴⁾、先に挙げた一行目にもすでに見られるように Beer (1978) が単独の -n- とするところ Colledge and Walsh (1978) は n が一つ省略されているとして -nn- としているのが目に付く。また、Beer (1978) が連続する四つのミニムを -un- と読んでいるところで、Colledge and Walsh (1978) は常に -nn- と読み、従って n が省略されている場合に省略を補う場合にも、自分自身の方針に従っている⁵⁾。

²⁾ Colledge and Walsh (1978) は Long Text を Paris 写本を中心に校訂し、Sloane 2499 と 3705、Westminster Cathedral 写本、Upholland Seminary Library の断章、Serenus Cressy (1670) の校訂版と校合している。Marion Glasscoe (1976) は Sloane 2499 を中心に校訂し、Sloane 3705 と Paris 写本を校合している。

³⁾ Beer (1978) の Short Text は *The Helsinki Corpus of English Texts* (ICAME) に採用され、電子コーパスを利用した通時的研究に利用されている。Long Text と Short Text 両方の校訂を含む Colledge and Walsh (1978) は多くの研究において定本として利用され、引用されている。

⁴⁾ Beer (1978) が And で文を始める場合に、Colledge and Walsh (1978) は先行する文に続けて、小文字で始める場合が多く、f. 97r, l. 31 等に関してその相違が見られる。Julian は各章を始めるにあたって頻繁に and を用いているので、大文字で表記されていない場合においても、Beer (1978) の校訂は十分な根拠がある。第三、四、五章等の始まりを参照されたい。

⁵⁾ 例えば、f. 98r, l. 8 において、二つのミニムの転写に関して、Beer (1978: 41) は aunswerde と、二つのミニムは u と綴って n がその後ろに省略されているとしている。一方で、Colledge and Walsh (1978: 208) は同じ語を anwserde と転写している。

Beer (1978) も Colledge and Walsh (1978) もこの Amherst 写本を校訂するにあたり、詳細に Long Text との異同を校合しており、それらの注を見ると、Amherst 写本を調査して、今後新たに見つけられるようなことはほとんどないような気さえする。さらに、この気分に追い討ちをかけるのが Reynolds and Holloway (2001) である。この八百頁以上から成る大著は、Sister Anna Maria Reynolds が Julian of Norwich の写本を校訂していたものを、Julia Bolton Holloway が見つけ、手を加えて出版したもので、Westminster Cathedral, Paris, Sloane 2499, Amherst の各写本が、各葉の頁ごとに詳細に転写され、Sloane 写本以外は頁ごとに現代語に翻訳されており、それぞれの脚注には写本間の異同が示されているばかりでなく、それまでの主要な校訂版とも綿密な校合がなされている。この巻に付された写本間の関係と、校訂版と写本との関係を示す系統図においては、Short Text と Long Text の関係に関してこれまでの通説と異なる提案がなされており、Julian of Norwich の研究者を驚かせているが、本研究は複数の写本について包括的に調査するものではないので、現存する写本間の関係まで深入りしないことにし、Reynolds and Holloway (2001) については、各写本の転写と写本間の異同を示す脚注のみを利用することにする。

この Reynolds and Holloway (2001) を代表として、Amherst 写本自体の研究はすでにやりつくされているといった感があるが、本研究では、これら先行研究で提案されている読みとは異なるさらにもう一つ別の読みの可能性があると考える箇所について論じる。

2 B. L. Additional MS 37790 (Amherst 写本) : その写字生と校正者

二つの版それぞれの脚注や序文を参照し、さらに、Reynolds and Holloway (2001) を参照し、実際の Amherst 写本のマイクロフィルムの該当箇所を確認する作業を進めるうちに、先に述べたように、Beer (1978) と Colledge and Walsh (1978) には違いがあること、その本文の内容を左右するような違いを生み出しているのは、ほとんどの場合、それぞれの編者の校訂の方針の違いであることに気付いた。Beer は、その導入部 (1978: 7-37) の中に、写本の校正者 (Corrector) について扱う節を特別に設けている (1978: 20-22)。それによると、Amherst 写本自体は十五世紀半ばの成立で、字体は Anglicana Formata に一致することが認められている。巻を通して一人の写字生によって転写されており、Beer が “clear and elegant” (1978: 10) と、また、Colledge and Wallace が “clear, bold and well-formed” (1978: 1) と評する美しい字の書き手である。この写本に手を入れた校正者は三人とされ、そのうちの一人は、Amherst 写本の成立年代と同時代の十五世紀半ばの人と考えられており⁶⁾、*Revelations of Divine Love* 全体を通して訂正を加えていること

が指摘されている。この校正者について、Beer は非常に興味深い考察を加えており、Beer (1978) と Colledge and Walsh (1978) の校訂が大きく異なる部分のほとんどは、この校正者による訂正部分の扱いの違いによる。

この校正者の校正の仕方を見て行くと、その校正者が施した訂正のいくつかが、Long Text と共通していることに気が付く。Beer (1978: 20, 21) はもちろんこのことを指摘し、Long Text の読みに沿うような訂正がなされているところを指摘したばかりでなく、Amherst 写本の手本となった写本を見ただけではこのような訂正はなされ得ないであろうと思われるような訂正がなされた箇所をも指摘し、この校正者は現存する Long Text と同じ系統に属するものか、もしくは Long Text とそれらの箇所が共通しているものを参照して訂正したと類推している。さらに、Long Text に沿っていないように見える訂正箇所や、Long Text を参照したのであれば訂正されるべきところが訂正されていない箇所も指摘し、それらを考え合わせた結果、この校正者の訂正は信頼できるものではないと結論づけた。訂正を採用するのは、この校正者の訂正がなければ Amherst 写本が解読しにくくなっている場合、もしくは、Amherst 写本の読みが信頼できない場合のみとし、事実そのようにしている。

これに対し、Colledge and Walsh (1978) はこの校正者の訂正を常に採用しており、修正として書き込まれていることを脚注でのみ示し、本文中では Amherst 写字生のものと表記上区別されていない。Beer が Amherst 写本のもともとの読みを採用している箇所で、Colledge and Walsh (1978) が校正者の修正を Amherst 写字生の読みと区別することなく採用するので、二つの校訂版に違いが出るのである。例えば、f. 98v, l. 6 において、校正者は Amherst 写字生が “a Iouene wyrkyng” としているところの Iouene を消して、pryue と上に書き加えているが、Beer (1978: 42, 82) は Amherst 写字生の読みでは意味を成さないとし、かつ、校正者の修正をそのまま採用することもせず、[de]rne と校訂している。同じ箇所に関して、Colledge and Walsh (1978: 209) は脚注において校正者の修正に触れ、校正者の読みである pryue をそのまま採用している。

3 五つ目の啓示をめぐって

前節で述べたように、Amherst 写本の手本以外の写本を参照したと推測される校正者の存在は、十五世紀の *Revelations of Divine Love* の写本の流通について考える上でも、Short Text と Long Text の関係を考える上でも非常に興味深い。本研究は、この校正者が現存する Long Text の写本に近いものを手本として参照していたならば、当然修正されているべきところを修正されていないとして Beer (1978: 22) が挙げた箇所の一つ、

⁶⁾ Colledge and Walsh (1978: 1) 等も同様。

f. 102r の 8 行目から 10 行目にかけての部分に注目する。Julian of Norwich が五つ目の啓示について述べ始める箇所である。Amherst 写本のこの部分を確認しても、Beer の指摘の通り、校正者によって書き加えられた跡は何も認められないが、Beer (1978) も Colledge and Walsh (1978) も *houre* と綴られた語を *or* の誤りであるとし、*woundes* または *wonndes* のように読める語も *words* の誤りであるとしている。

Beer (1978: 50):

And aftyr this, [or] god schewyd me any wo[r]des, he suffyrde me to behalde langere and alle that I hadde seene & alle that was thereyn.

Colledge and Walsh (1978: 227):

And aftyr this, or god schewyd me any wo(r)des, he suffyrde me to be halde langere, and alle that I hadde seene & alle that was there yn.

Amherst 写本の *houre* を *or* と修正する根拠は、Long Text でこの同じ五つ目の啓示について述べる箇所が写本ごとに、それぞれ Sloane 2499 で *or*、Sloane 3705 で *before*、Paris で *or that* と、どれも *ere* (*before*) の意味になっているからである。Beer (1978: 87) の巻末注は “confusion between houre and or could result from dictation” と、この誤りがこの写本の成立に至るまでの過程のどこかで写字生の聞き間違いから生じた可能性を指摘すると同時に、*wounds* ではなく *words* であるとする理由について以下のように注釈している：

the woundes/wordes error involves a simple confusion of two visually similar words. A's woundes is improbable, since God has just finished showing Julian his wounds (50/7ff.); and directly after this vision, words are formed in her soul: “herewith ys the feende ouercomyn” (50/22-3)

また、Beer (1978: 50) の脚注は Long Text の写本 (Paris, Sloane 2499, Sloane 3705) では *wounds* の箇所がいずれも *words* となっていることを示している。一方で、Reynolds and Holloway (2001: 730) は Westminster Cathedral 写本では *woundes* になっていることを示している。確かに、この五つ目の啓示についての Long Text の該当箇所は *wounds* ではなく、全て *words* となっているが、*wounds* の読みは果たして完全にあり得ないのだろうか。

4 Amherst 写本の読み

本研究は、Julian of Norwich の Short Text の原本がこの部分をどう表記していたかについてを問うものではなく、少なくとも Amherst 写字生の読みとしては可能性があり、Amherst 写本の手本でも同じ読みがなされていたかもしれない解釈について考察を加えるものである。本研究は、Amherst 写本と Westminster 写本に残されている wounds の読みはあり得ると考える。また、Long Text の該当箇所を参照して *houre* を *or* と修正するという各校訂版が採った読みとは違う読みの可能性もあると考える。本研究が可能性があると考えられる Amherst 写本のこの部分の読みはどちらの語も修正しない次のものである：

And aftyr this houre god schewyd me any woundes. He suffyrde me to behalde langere and alle that I hadde seene & alle that was thereyn.

修正を考えない可能性を考え始めた理由は、この部分の前後に “And aftyr this” で始まる文が頻出し、この表現が現れる度に次の啓示に話題が移って行くということに気がついたからであった。Beer (1978) に従って、それらの箇所を示す。

(1) And aftyr this I sawe with bodely syght the face of the crucifixe that hange before me, (p. 49, l. 14, 15)

(2) And aftyr this I sawe god in a point, that es in myne vndyrstandynge, by whilke sight I sawe that he es in alle thynges. (p. 49, ll. 24, 25)

(3) And aftyr this I sawe behaldande the bodye plentevouslye bledande, hate & freschlye and lyfelye, (p. 50, ll. 7, 8)

(4) & aftyr this I felle into a saddehete & sayde, (p. 51, l. 15)

(5) And aftyr this oure lorde schewyd me a souerayne gastelye lykyng in my sawlle. (p. 52, ll. 12, 13)

(1) は二つ目の啓示に話題が移る箇所、(2)は三つ目、(3)は四つ目、(5)は七つ目の啓示に話題が移る箇所である。(4) は新しい啓示の始まりを示すものではないが、ここでも明

らかに次の話題に移っている。Beer (1978: 51) はここから新しい段落が始まるように校訂している。そして、これらの箇所では、どの例も “aftyr this” の後ろに主節が続いている。問題の箇所でも同様に主節が来る可能性を考えると、*houre* は *oure* の異綴りである可能性が考えられる。*The Middle English Dictionary (MED)* は代名詞 *our(e)* の異綴りとして *h-* を伴った *hour(e)*, *hur(e)*, *hore* の綴りを挙げている。また、Beer (1978: 17) はその序章の “Phonology and Spelling” の節において、フランス語起源の語頭の *h-* について触れ、*ese* は普通 *h-* を付けずに書き表されているのに、一箇所だけ *hesyd* となっていることを指摘している⁷⁾。

これらのことを考え合わせると、*oure* の読みも捨てきれないと考える。また、これを *oure* と読むと、先に列挙した “And aftyr this” で始まる箇所の最後の例 “And aftyr this *oure* lorde schewyd me a souerayne gastelye lykyng in my sawlle.” (Beer, 1978, p. 52, ll. 12, 13) と非常に似通った構造に見える。しかしながら、この読みが完全に自然であるとは言い切れない理由が二つある。一つは、他の箇所では *Julian* は “*oure* lorde” という表現を使い、“*god*” は単独でしか用いていないという点である。一方で、“*oure* *god*” という表現が当時不自然な表現であったかということ、そのようなことはなく、ヘルシンキコーパスの後期中英語の作品を検索すると、同時代の神秘主義作家 Richard Rolle が何度かその表現を用いていることが見受けられる。もう一つ不自然に感じられるのは、*houre* を *oure* と取ってしまうと、続く節をゼロ接続詞に導かれる節と取るか、*wounds* を先行詞とする関係代名詞節と解釈するか、別の文と取らなければならなくなる点である。中尾 (1972: 369) によれば、ゼロ接続は十四世紀から頻繁になるが、韻文に多く起こるといふ。散文作品の *Revelations* に用いるには十分な理由が見当たらないし、“*he suffyrde me*” で始まる節を従属節とすることには無理がある。Beer (1978) と Colledge and Walsh (1978) が *Long Text* に即して *houre* を *or* と解釈したもう一つの理由はこのことによると推察される。次に、*wounds* に後ろの節がかかっていくと解釈であるが、これは文脈上あまり自然に感じられないし、“*and alle that I hadde seene & alle that was thereyn*” をどう文法的に解釈すれば良いかわからなくなる。これに対して、“*he suffyrde me*” で始まる節を新たに始まる文であると解釈し、*and* と *&* に導かれた等位の名詞句を *behalde* の目的語とする読みは、*Long Text* との意味の相違を考えなければそれほど不自然ではない。Amherst 写本だけを忠実に転写した Reynolds and Holloway (2001: 730) は脚注で写本間の異同について詳細に観察しており、他の校訂と同様に *houre* を *ere* と取っているが、*wounds* はそのままにし、修正を加えてはいない。そもそも、このテキストが転写されていく全ての過程で、写字生達が *Long Text* を参照した

⁷⁾ Amherst 写本の f. 106v, l. 27 (Beer 1978, p. 61, l. 15) で用いられている。

ということはある得ない。写字生達は、その手本を直接見たり、読み上げられるのを聴いたりして、これで文章の意味が解釈できると理解した通りに書いたと考えるのが自然であろう。そう考えると、校正者が全く手を入れていない一文に後の時代になって二箇所も修正を加える校訂は、この Amherst 写字生自身の解釈を考えるならば不自然であると考える。先に述べたように、*houre* を *ere* の異綴り *or* としなくて済むならば、*wounds* と綴られている箇所を、Beer (197: 87) の巻末注にあるように、文脈上あり得ない読みであるとし、Long Text を参照して *wounds* を *words* の誤りであるとする必要はなくなる。

5 おわりに

Julian of Norwich の経歴に関しては、著作 *Revelations of Divine Love* を除けば、*The Book of Margery Kempe*、彼女を指していると思われる遺言書といったわずかな数の周辺の資料しか残されていないため、詳しいことがわかっていない。また、Amherst 写本が *Revelations of Divine Love* の写本の系統の中でどのような位置を占めるのか、その Short Text の原本の成立年代⁸⁾、Long Text に対して Short Text がどのような位置にあるのか等についても、さまざまな推測がその研究史上なされてきた。Short Text の成立に関しては、Amherst 写本が北部方言の性質をかなり強く示すことから⁹⁾、Amherst 写本自体が Short Text の原本であるとは考えにくく、Amherst 写字生が手本とした写本が存在した可能性がある¹⁰⁾。従って、その写本の存在を仮定すると、本研究が指摘した箇所については、Short Text の手本は現存する Long Text の系統とは異なる読みをしていた可能性を考える必要が生じる。Amherst 写本、つまり Short Text と Long Text との関係が明らかでない限り、Short Text と Long Text を校合して Short Text を修正する形で校訂すれば、Amherst 写本に現れた事実だけを利用して校訂することにはならないため、Long Text との関係を推測する場合に有効な資料とは言えなくなる。Long Text との関係を論じるためには Short Text を転写した Amherst 写字生の読み、それと同時代の校正者の読みを正確に判別することが必要である。

本研究が取り上げた B. L. Additional MS 37790 f. 102r は、これまでに出版された Short Text の主要な二つの校訂版のどちらもが苦心して解釈していると思われる箇所だ

⁸⁾ Julian of Norwich の経歴については、Colledge and Walsh (1978: 33-38)、Beer (1978: 7-9)、Bauerschmidt (1999: 203-12) の Appendix: Who Was Julian of Norwich? 等参照のこと。Bauerschmidt (1999: 203-12) には Short Text の成立年代に関して先行研究が詳しくまとめられている。

⁹⁾ Beer (1978: 9-20)、Colledge and Walsh (1978: 28-32) 等の Amherst 写本の方言に関する考察を参照されたい。

¹⁰⁾ Beer (1978: 14-20) はその方言に関して考察し、Amherst 写本に至るまでいくつかの写本を経ている可能性を考えているが、それと同時に、写本がどれくらい回数を重ねて書き換えられたかを、その写本をもとに推測することが非常に難しいことにも言及している。

けあって、その部分に関して Amherst 写字生がどう読んだのかを簡単に結論づけることはできない。しかしながら、本研究で試みたように Amherst 写字生独自の読みに着目することが、現在も議論を呼んでいる *Revelations of Divine Love* の Short Text、Long Text また、Westminster Cathedral Text の成立を考える上でまず必要な作業であると考ええる。

参考文献

- Rissanen, M., et al. (eds.). (1991) *The Helsinki Corpus of English Texts: Diachronic and Dialectal*. ICAME, Bergen.
- Bauerschmidt, F. C. (1999) *Julian of Norwich and the Mystical Body Politic of Christ*. University of Notre Dame Press, Notre Dame and London
- Beer, F. (ed.). (1978) *Julian of Norwich's Revelations of Divine Love*. Carl Winter Universitätsverlag, Heidelberg.
- Colledge, E. and J. Walsh (eds.). (1978) *A Book of Showings to the anchoress Julian of Norwich*. 2 vols. Pontifical Institute of Mediaeval Studies, Toronto.
- Edwards, A. S. G. (ed.). (1984) *Middle English Prose: A Critical Guide to Major Authors and Genres*. Rutgers University Press, New Brunswick, NJ.
- Glasscoe, M. (eds.). (1976) *Julian of Norwich, A Revelation of Love*. University of Exeter, Exeter.
- Kurath, H., S. M. Kuhn & J. Reidy (eds.). (1952-2001) *Middle English Dictionary*. University of Michigan Press, Ann Arbor.
- Murray, J. A. H., H. Bradley, W. A. Craigie & C. T. Onions (eds.). (1933) *The Oxford English Dictionary*. 13 vols. (2nd ed. prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner, 20 vols. Clarendon, Oxford, 1989) Oxford University Press, Oxford.
- Parkes, M. B. (1969) *English Cursive Book Hands 1250-1500*. Clarendon Press, Oxford.
- Petti, A. G. (1977) *English Literary Hands from Chaucer to Dryden*. Edward Arnold, London.
- Reynolds, Sr A. M. and J. B. Holloway (eds.). (2001) *Julian of Norwich, Showing of Love, Extant Texts and Translation*. Biblioteche e Archivi 8, SISMEL-Edizioni del Galluzzo, Tavarnuzze – Impruneta – Firenze.
- 中尾俊夫 (1972) 『英語史 II』 英語学体系第 9 卷, 大修館, 東京.

本稿は 2003 年度広島修道大学総合研究所調査研究費による研究成果の一部である。